

博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名(フリガナ)	バトラー 後藤 裕子(バトラー ゴトウ ユウコ)
在住国名	アメリカ合衆国
所属・役職	ペンシルバニア大学教授
招聘回(招聘研究期間)	第14回(2019年9月1日~2020年8月20日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	テクノロジー進化時代に必要な言語能力
研究目的	日本の小中学生のテクノロジー使用の現状と言語能力との関係を把握し、現在学校教育が求めている言語能力(学習言語)とのギャップを理解することを目的とする。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <p>「中学生および大学生のデジタル・テクノロジーの使用実態と読み書き能力との関係、および学習におけるデジタル・テクノロジーの役割に関する彼らの考えを把握する」ということであった。中学生に関しては、(1)週1回、都内の公立中学に学習支援室のボランティアとして入り、週1回、学習支援の必要な生徒の個人・グループ指導を行いつつ、彼らの学習言語における問題点を観察、(2)1年生、2年生全員に、学習語彙、教科書の読みに関する自己評価を実施、(3)スマホ、動画アプリなどテクノロジーの使用に関するアンケート調査を実施、(4)1年生、2年生全員に、スマホに関する作文を書いてもらう、(5)テクノロジーの使用と、自己評価の結果、リーディングスキルテストの結果、作文の結果、および期末・中間試験との関係性を分析・調査した。</p> <p>大学生対象の研究に関しては、試験の終わる2月以降からの調査を予定していたが、コロナ感染による大学の閉鎖のため、データは収集できなかった。そのため、コロナ自粛以降は、予定を変更し、「デジタルとこども」(仮題)と称して、実証研究をもとにしたテクノロジー世代の子どもたちの言語能力に関する本を執筆することに集中した。ちくま書房での出版が決まっている。全7章の予定で、現在5章を執筆中。今年末までに全章を書き上げる予定。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>偏差値がほぼ50の平均的な公立中学における調査のまとめ 読解に関しては、以下の結果が得られた。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) スマホの使用時間 1日平均257分、約4人にひとりが日に5時間以上 (2) SNSと動画の使用が多い (3) 約2割の生徒が教科書の漢字・内容が半分またはそれ以上わからないと自己評価している (4) 約2割の生徒が教科書に出ている学習語彙が2%以上わかっていないと自己評価している(自力で読解できるには98%以上の語彙が必要、Hu & Nation, 2000; Laufer, 1989; Schmitt, Jiang, & Grabe, 2011 など) (5) その中には理論的な読解を行うのに不可欠な語彙が含まれている (6) リーディングスキルテストの中で、AIが現在のところ不得意とされている、意味を理解するサブ・スキル(推論、イメージ、具体例同定)において、スマホの使用時間の影響が見受けられる。 <p>作文に関しては、以下の結果が得られた。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 作文データからは、あまり有益な情報は得られなかった。その理由としては、全体に作文が短く(総文字数が少なく)、量的にも質的にも信頼性の高い分析ができなかったことが考えられる。 (2) その一方で、文章を書くという行為自体を苦痛とする生徒が少なからずいるということが分かった。3人に一人が、身近な話題話(スマホ)について、十分な時間が与えられてるにも関わらず、100字以下の文章しか書けなかった。 (3) 100字以上書くことのできた生徒の間では、スマホの使用時間と作文のいずれの要素との間に、相関のあるものはなかった。 	
<p>3. 研究成果(予定を含む)</p> <p>○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))</p>	

・新書執筆「デジタルと子ども」(仮題)ちくま書房より出版予定

本書では、人間の持つさまざまな能力のなかで、特に言語という能力に焦点をあて、生まれた時からデジタル・テクノロジーに接してきた2000年前後以降に生まれた子どもたち・若者たちのテクノロジー使用と彼らの言語発達・言語能力との関係について、主な実証研究をもとに、科学的に考えていくことを目的とする。内容は以下の通り。

はじめに

第1章 変化するテクノロジー環境の中で生きる子どもたち

- a. 子どもたちを取り巻くデジタル環境
- b. 子どもたちのデジタル使用の実態(早期からのデジタル使用、進む動画嗜好、SNS 依存)
- c. デジタル社会のニーズに遅れをとる日本の教育と広がる言語力格差

第2章 動画・テレビは乳幼児にどう影響するのか？

- a. テレビ・動画と乳幼児の認知力-「バックグラウンド視聴」と「ビデオ効果不全」に注意
- b. テレビ・動画を効果的に利用する条件
- c. 乳幼児用の外国語学習アプリは効果があるのか

第3章 オンラインと紙の違いは何？ マルチメディアと読解力

- a. デジタル絵本は子どもの読解力を高めるか？一使い方次第
- b. オンライン上の読解力はオフラインとは違うのか？

第4章 SNS のやりすぎは教科書を読めなくする？

- a. SNS 上の言語使用
- b. SNS 使用が言語発達・コミュニケーション能力に与える影響
- c. 学習言語とのギャップと格差の問題

第5章 ゲームは時間の無駄か？

- a. ゲームの種類と使用実態
- b. ゲームは言語発達・学習の助けになりうるのか
- c. ゲームを使った言語学習の未来像は？

第6章 人口知能(AI)はコミュニケーションの助けになるのか？

- a. 幼児の言語発達と AI ロボットとのインターラクション
- b. AI ベースの教材と言語学習
- c. AI 翻訳と外国語学習の行方

第7章 デジタル時代の言語能力

- a. 求められる言語能力とは何か
- b. 保護者や学校教育は何をサポートすべきか

おわりに

引用文献

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

・日本心理学会(2020年9月8日)バーチャルでの開催予定

「早期外国語教育における母語の役割について」(仮題)

・産業日本語研究会(2021年3月5日)バーチャルでの開催予定「サイバー時代の日本語」というテーマの学会で招待講演を予定。まだ講演のタイトルは未定だが、デジタル時代の子どもの言語能力について話す予定。

○その他の活動

・板橋区教育委員会「読み解く力開発推進委員会」の委員として、1年間、同区の授業参観や読解力推進のためのさまざまな活動に参加。

・都内の公立中学の支援教室にボランティア指導員として週1回指導を行う。

4. 今後の活動予定

今年中に新書を書き上げ、来春出版の予定。